

## 基調提案 2

### — 題材実践を通して

### 造形遊びから絵画教育への道筋を探る

西井恵美子

NISHII, Emiko

和歌山市立松江小学校 教諭

#### ■プロフィール

1972年和歌山生。京都教育大学で発達障害学専攻卒業し、和歌山市小学校教員。和歌山大学附属小学校で図工科教育を担当(2004-2010年度)後、現職。

#### ■専門領域・研究課題

造形遊び、題材開発

造形遊びにおける素材体験を通しての身体的な学び、子どもの身体感覚から生まれる表現の学びを研究したいと考えている。造形遊びの新たな可能性を探りたい。

#### ■主な著作・作品など

論文等：

- ・『資質・能力を育む 新図工科授業づくりのアイデア集 指導と評価のポイント1年編』(岩崎由紀夫・竹井史 編著)
- ・『質の高い学びを創る授業改革の挑戦—新学習指導要領を超えて—』(2)《ぬるぬるであ・そ・ほ》(1年生・図工)(佐藤学・和歌山大学教育学部附属小学校著)
- ・和歌山大学教育学部附属小学校 研究紀要『“感じる”⇔“表す” 学びの連鎖—造形遊びからひろがる学び—』(和歌山大学教育学部附属小学校著)
- ・「造形遊び」と「絵や立体、工作に表す」をつなぐ—その学習展開の試み—(日本教育美術連盟主催)
- ・『美術教育実践研究—和歌山大学美術教育研究会誌』NO.1
- ・「授業実践『木でできタワー—木に触れる・木とかかわる・木でつくる—』教育美術2012 AugNO.842」

#### ■社会的活動

和歌山大学美術教育研究会会員 (2004-)  
和歌山市図画工作教育研究会会員 (1996-)  
和歌山県美術協会会員 (1996-)

■E-mail emiel@iris.eonet.ne.jp

## 1. 造形遊びから絵画教育へ

### — 「造形遊び=身体感覚教育」から「描画活動」へと展開する題材の試み—

造形遊びは多面的な性格を持つが、その成立の経緯からみても図工科教育全般にわたる基礎としての性格が強く、特に感覚教育としての側面が重要であると考えられる。色や形、手触り、においや音…といった、子どもが身体感覚を研ぎ澄ませてもいや場、空間と触れ合いながら得る学びは、さまざまな造形表現の基礎となるものである。

和歌山大学美術教育研究会では、造形遊びの身体・物質・物体などにかかわる感覚教育としての造形遊びから出発し、様々な「線」を生み出す描画活動へと発展させる題材群を開発するプロジェクトを行った。「オルタナティブドロ잉」と名付けられたこの題材群は、いづれも子どもの身体感覚を現代美術の手法を契機に線描へと導く構造を持ち、あたかも1960-1970年代美術から「絵画」へと美術史を遡行するような展開として小学校における造形活動の軸の提案となっている。以下に筆者のかかわった題材の実践を通して、その紹介と検証を行いたい。

#### 《題材開発 I》

■題材名：『からだでかいてみよう～芒、蒲をかく～』

■対象学年：小学校第2学年

#### ■題材について

中国や日本の絵画では、筆による描線の価値は第一に「気韻生動」にあるとされてきた。子どもの描線も生命感あふれるものである。まずは、身体全体を使って伸び上がる身体運動を意識しながら線を描いていく。そこに描線のダイナミズムを感じながら進めるうちに、身体運動の軌跡であった線が草の世界のように「見える」ことに気づく。このように、身体の行為性が重要な前半の活動から、穂を描き加え鑑賞する中で視覚性が大きく浮上する後半の活動へと展開する学びが絵画教育への可能性を感じさせる。

#### ■学習目標

- (1) 線を描くことに関心を持ち、よさやおもしろさを感じる。[関心・態度]
- (2) 刷毛や筆から生まれる線を楽しみながら自分の描きたい線を思い浮かべる。[発想・構想]
- (3) 草や芒、藁を思い浮かべ、腕、身体全体を使って描線する。[創造的技能]
- (4) 見立てや線が絵になることに気づき、自分や友達の表現や活動のよさを味わう。[鑑賞]

#### ■指導計画

【第一次】：身体で描くイメージを持つ。

【第二次】：草の線を描く。

【第三次】：線や線によって生まれた世界を鑑賞する。



繰り返すうちにさらにダイナミックな動きへ



自分の身体を越える描線の軌跡

### ■指導のポイント・学びのフォーカス

#### (1) 身体の動きで線を描いて楽しむ造形遊び

子どもたちが身体全体を使ってのびやかな線を描くイメージを持てるよう、まずは、腕やひじ、足やひざなど、身体全体を使って下から上に伸び上がる動きを繰り返し体験する。その後、水を含ませた刷毛を持ち、実際に黒板に向かって線を描いてみる。すると、みるみるうちに黒板に草の線が生まれていった。しかし、黒板に描いた線はすぐに乾燥して消えていく。描いては消え、消えては描く遊びを通して、子どもたちは身体の動きをつかんでいった。

#### (2) 材料・用具と場の設定

画材は墨、刷毛と書筆を用いる。墨は自然と奥行き感が生まれるよう、濃墨と薄墨の2種類を事前に用意し、画面は1m×2mくらいの模造紙である。その大画面に向かって、クラス全員の前で一人ひとり前に歩み出て、線を描いていく。友達に見守られ、緊張感が高まる場である。そこで、線の向きや他の線とのバランスなど、線を描く前に見通しを立て、心が定まったところで一気に描き上げる、「気韻生動」である。一斉にそれぞれが遊びながら描く場ではなく、一人ひとりの表現を大切にすることを設定することで、身体感覚や線に対する意識が研ぎ澄まされていく。子どもたちは2年生という学年以上の集中力を持って取り組み、生き生きとした線を生み出した。



身体を使って伸び上がりながら描く

#### (3) 画面の変化を鑑賞する

草の線を描き終わった後、その画面を鑑賞する。ある子どもが「草の世界ができた」と表現すると「草の中にいるみたい」「バッタになった気分」などと続く。1本の草の線を描くときは、その線だけに意識を注いでいたが、離れて見るとその全体をとらえ、鑑賞の能力をいきいきと働かせる。そこに芒の穂を描き足す。すると「草の世界」が「芒の世界」に変わっていくのを感じ、「芒の世界」に入り込んでいく。「さっきのはね、夏だよ。これは秋。」と植物の季節感まで感じ取った言葉が生まれた。一つひとつの線が集まり、重なり合い、奥行きを生み出していることをしっかりと感じ取りながら味わっている。それは、子どもが鑑賞によって、身体運動で生まれた線を視覚的、絵画的な表現としてとらえている言葉である。

#### ■題材を終えて

本題材は、身体活動を重視していきいきと線を描く学習と、生み出された線たちが作り出す空間やイメージを視覚的にとらえる鑑賞の学習が自然な流れでつながっている。子どもたちは描いたものを鑑賞し、さらにその上に表現を重ねて出来上がったものを再び鑑賞することで、生き生きとした線の重なりが空間を生み出すことや、空間のイメージが変化することにも気づいていった。2年生の子どもたちが描いた線の一つひとつ、それは身体いっぱいの表現である。子どもたちの表現の魅力を大いに感じながら、身体感覚を生かした造形遊びから描画活動へと展開する題材としての可能性を感じた。



「芒を描く」和歌山市立松江小学校2年生、2011

## 2. 「形と色の遊び」から「絵画」へ

### 一「図」の生成からその構成へと展開する題材の試み一

図工教育の基礎に色や形に感覚的にかかわることがあるとすれば、その色や形は未だ名付けられる以前の輝きと驚きを持っている必要があるだろう。かつて、色や形の基礎練習を目指した「構成教育」には、そのための方法論にどこか問題があったのかもしれない。

子どもたちが色や形にかかわるとき、それは「絵画」とは呼べない「図」やその集まりであることが多い。画用紙には描かれても、そこでの構図や地と図の構成などは意識されることはない。このような子どもたちの色と形にかかわる活動を積極的にすくい取るために「図」としての「絵画」、すなわちシェイプトキャンバスによる作品を展開したフランク＝ステラの作品群を参照して題材開発を行った。

色と形に感覚的に（記号的でなく）かかわるために「色面オブジェ」という色板作りから始まる「絵画」に向けた学習展開のバリエーションを開発実践した。以下に紹介・研究検証するのは、私がかかわったレリーフ絵画への展開例である。

#### 《題材開発Ⅱ》

■題材名：『何にも似ていないカタチ、生まれる?!』

■対象学年：小学校第4学年

■題材について

子どもが純粋な色と形に向き合えるようにするために、「何にも似ていないカタチ」をつくってみようと投げかけて学習を始めた。「何にも似ていない」ことに意欲を持った子どもたちは次々に形をつくり出し始める。そして、つくり出したものを見て、並べ、いくつかを組み合わせ、その色合いや重なりを自分のイメージを持って構成していく。そうして作品が出来上がった時にはじめて、自分の表現したものが「絵画」のように見え、それを名づけたり、意味づけたりしたくなるような世界が生まれていることに気づくという題材である。

#### ■学習目標

- (1) 色や形に感覚的に深くかかわり、楽しむ。[関心・態度]
- (2) 色画用紙に感覚的にかかわり、魅力的な形を切り取り、構成する。[発想・構想][創造的技能]
- (3) 色や形の持っている、それぞれの独特な感じ、それぞれの作品のよさに気づく。[鑑賞]

#### ■指導計画

【第一次】：何にも似ていない形を思い浮かべて切り取る。

【第二次】：いくつかの形で構成する。

#### ■指導のポイント・学びのフォーカス

##### (1) 形への意識

「何にも似ていないカタチ」と投げかけたことで、子どもたちの発想が既成のものから解放される。色が豊かで発色もよい、少し厚みのある用紙から自分の好きな色を選んで、子どもたちは積極的に活動を進めていった。

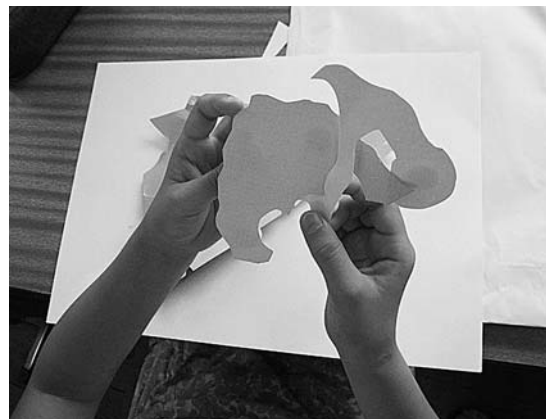
はさみで切り取り生まれるのは、直線、曲線、二つのコンビネーション。何にも似ていない形をそれぞれがイメージし、試行錯誤を重ねながら形をつくりだしていった。



はさみから様々な線が生まれる



次々に何にも似ていない形を発想する



おもしろい重なりを発見し、奥行きを生み出す

## (2) 形と形から「絵画へ」

出来上がったたくさんの形と対話する子どもたち。その形から浮かんでくるイメージや言葉を自然とつぶやいたり友達と交流したりするようになる。そして、いくつかの形を構成していく中で、色の組み合わせや重なりによって、様々に試し、納得のいく並べ方や重ね方を見つけていった。そして「これだ!」というところで固定していく。その際、スチレン製のクッション材(径15mm×厚み7mm、両面接着)を使うことで、形に影が生まれ、奥行きを生み出すことができ、子どもの表現に広がりを持たせることができたと感じる。子どもたちは「世界が出来てきた」「絵みたいに見えるなあ」と口にし、一つひとつの形を意識しながらも全体を「絵画」のように見立てて表現していった。



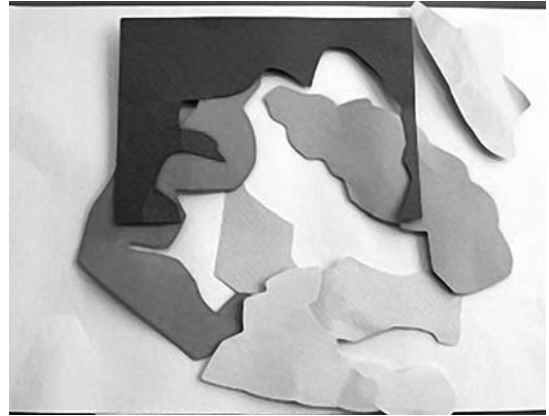
「これだ!」というところで固定する

## ■題材を終えて

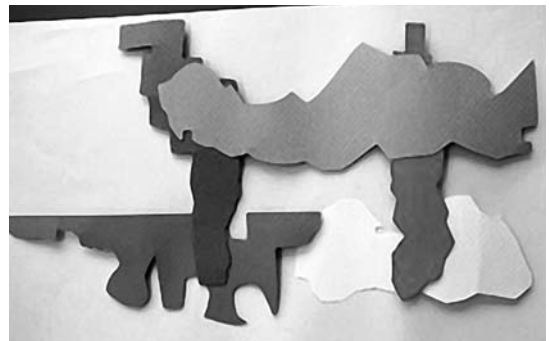
本題材は、色と形に感覚的にかかわる遊びから出発しながら自由な表現を生み出し、ステラ的な「色面オブジェ」となり、次にそれらを並べたり重ねたりするうちに「絵画」が生まれる前段階を体感するというような学習展開である。そこから生まれた子どもの作品は、一つひとつの形の寄り集まり一図の集合体であるのだが、その中に絵画としてのおもしろさや魅力を見出すことができる。抽象的な色と形で造形的な表現を行いながら、そこから生まれる構造が「絵画」として鑑賞できたことで、緊密な構造体ではないものの、ステラの言う豊かさへの開放が感じられたように思う。

また、本題材の対象学年である9歳前後の子どもは図式期から脱し、絵に写真のような写実性を求める時期であるが、それと同時に巧拙を気にし始めたり、表現への硬直が見られたりする時期でもある。そんな時期だからこそ、純粋な色や形に出会い、感覚的に向き合うことが大きな意味を持つのではないだろうか。心身を開放し、自由な表現へと導くことができるのがこの題材のもう一つのよさであると感じている。

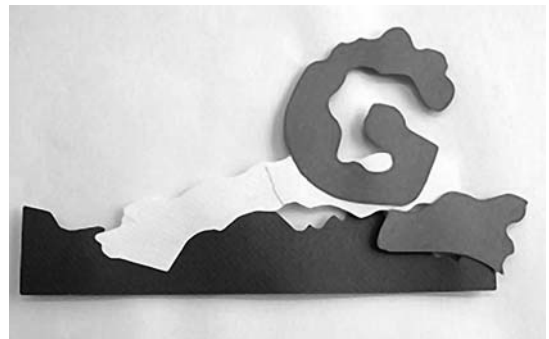
## ■児童の作品(和歌山市立松江小学校4年生、2012)



「海の町」



「みなぎる力」



「わるい夢」



「どこにでもうつる」